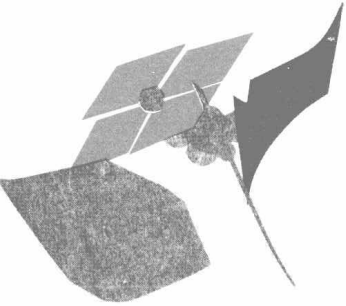
立原正秋選集　第七巻

夏の光・きぬた



立原正秋

新潮社版

立原正秋選集 7
夏の光・きぬた
一九七五年六月二〇日発行
一九七八年六月二五日二刷
著　者　立原正秋
装幀者　妣田圭子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話（業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一）
振替東京四一八〇八
二光印刷　新宿加藤製本
定価九五〇円
〈第九回配本〉
© 1975. Masaaki Tachihara. Printed in Japan

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

立原正秋選集 7 目次

七月の弥撒 5
雪のなか 17
鵙 28
橋の上 54
雪の朝 63
夏の光 76
きぬた 202

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

立原正秋選集 7

七月の弥撒

1

くみ子が自殺した、と達哉が電話で伝えてきたのは、日曜日の朝の八時すこしすぎだった。

周三は受話器を戻しながら、あいつ、なにも死ぬことはなかったのに、と思ったが、くみ子の死は痛ましかった。睡眠薬自殺だと達哉は伝えてきたのである。痛ましいと思うのは俺だけではないはずだ、と周三は考えながらも、しかしどいつもくみ子を汚したことには頬被りするだろう、と一方では思った。

周三は身支度して家をでたが、扇ケ谷津のくみ子の家の手前で引きかえし、聖堂へ向った。

横須賀線の踏切の手前の舗装されていない路では、前夜の雨に洗われて盛土が流され、下の小石がむきだしになっていた。むきだしの白っぽい小石はなにかくみ子を想わせて無慙だった。小石には朝の陽がさしていた。

周三はむきだしの小石を見たとき、俺はいつもくみ子にたいして優しさに欠けていた、と思った。そして、あれは過失などというものではなかった、と一年前の七月を想いかえした。

その夏は雨季あけがおそく、海開きもおそかった。雨季があけると、滋も幹彦も信三も山にでかけ、周三は終日テニスコートで時間をつぶした。三宅夫人が毎日テニスコートにあらわれるからであった。

「あの奥さんに夢中になってもだめよ」

とくみ子が言ったのは水曜日の午後であった。その日くみ子はテニスをしに来たわけではなかった。

「俺は夢中になどなっていないよ」

周三は、三宅夫人が鋭いスマッシュをやっているのを見ながら答えた。

「でも評判よ」

と、くみ子は言った。

「評判？」

周三はくみ子をふりかえった。

「火のないところに煙はたたないというじゃないの。みんなが噂をしているわ」

「噂なんてくだらないものだ」

周三はコートに視線を戻し、三宅夫人のしなやかな軀の動きを見ながら答えた。

「ヨットを走らせに行かない」

くみ子は周三の前にきて、自分のからだでテニスコート

の三宅夫人の姿がみえないように視野を遮りながら言った。
「俺は来たばかりじゃないか」
周三はくみ子の胸の盛りあがりを眩しそうに見ながら答えた。
「やめてしまったテニスをやりだしたことは、どういうわけがあるのかしら」
「わかったよ。海へ行こう。しかし、あのヨットは二人だけじゃちょっと無理だ。誰かひっぱって行こう。達哉か七郎のところに電話してみよう」
周三は、できれば俺の目の前にいるこの娘と二人だけでいたくないと思った。くみ子は男を惹きつけてはなさない女だ、と彼は以前から考えていた。そして、どこか外形と情念が均衡を保っていない女であった。彼だけでなく、滋も幹彦も信三も、くみ子にひっかかったらおしまいだ、と言っていた。おしまいだ、とは妙な表現であったが、つまり、みんなは、くみ子に手をだしたいと思いながら、手をだした後がこわかったのである。
ヨットは周三の学校の先輩である岡村さんの持物で、岡村さんが北海道から帰ってくる七月末まで、誰がつかってもよいことになっていた。ヨットは小坪海岸に繋留してあった。
「誰かをひっぱって行くったって、誰もいやしないわ。七郎は藤子と海へ行ったし、達哉は行きっこないわ」
くみ子が答えた。
「あのヨットは二人だけじゃ無理だ」
「今日は風がないわ。二人だけでも大丈夫じゃないかしら」
「じゃあ、とにかく、行くだけ行ってみよう」
周三は、妙なことになりそうだな、と考えながらくみ子とつれだってテニスコートをでた。
テニスコートから街におりる山路は蟬時雨に包まれ、午後の風が微かに吹きぬけていった。
二人は住宅街をぬけて若宮大路にでた。
「おや、あれは達哉じゃないか」
周三は、牛乳屋の店先で牛乳をのんでいる男を見つけて言った。二人は牛乳屋の前に歩いて行った。やはり達哉だった。
「おい、ちょうどいいところであった。ヨットを走らせに行かんか」
周三は、達哉の手からのみかけの牛乳壜をうばい、一息にのんだ。
「まったくいいところで出あったものだな。おまえの家に行ったら、テニスコートにでかけた、と言われたが、俺はあんな軟弱な運動には興味がねえときている。それで牛乳をのみにきたというわけさ。なにしろ、こう暑くっちゃな」
達哉の前のテーブルには空の牛乳壜が五本ならんでいた。

この牛乳屋では店先にテーブルがおいてあり、みんなそこで牛乳をたちのみしていた。
「よしてよ周三、二人だけで行くと言ったじゃないの」
くみ子が周三と達哉をにらみすえて言った。こんなときのくみ子は、節度がないというのではなく、他人の思惑をよそに自分だけを主張するような個所があった。
「もちろん俺は必ずしもヨットに乗る必要は感じていないんだ。おい、周三、行けよ。だが……」
「だが、どうしたの？」
くみ子が訊いた。
「おだやかじゃないな」
「へんなことを言うのはよして」
「よし、わかった。二人ともさっさと消えうせやがれ。牛乳をのむじゃまをするなど無粋だぞ」
「行くよ」
周三は達哉の肩を叩くと、牛乳屋の店先をはなれた。すると、おい、とうしろから達哉が呼びとめた。周三がふりかえると、達哉が左手のこぶしをあげてパッとひらいて見せた。いま、おまえが相手にしている女はすこしパアだから、気をつけろ、という仲間うちでの意味だった。
周三とくみ子は、めいめい自宅によってショートパンツに着替え、駅前で落ちあった。それから、逗子行のバスにのり、小坪でおりたが、海岸にヨットはなかった。
「岡村さんが帰ってきたのかな」
周三は、岡村さんのヨットが繋留してあった渚を見て言った。
「そんなはずないわ。……きっと、七郎が乗っているのよ」
くみ子も海面を見おろして答えた。
「一人でかい？」
「仲間が三人いたもの」
「誰だい？　藤子がいっしょだったとさっき言っていたな」
「あとの二人はあたしの知らない人。男と女よ。テニスコートに行く途中であったのよ」
「これじゃ帰るよりほかないじゃないか」
周三は内心ほっとしながら岸をはなれ、バス道路の方に歩きだした。
小坪はさびれた漁師町で、入江にそって小さな家がならんでおり、せまい路地には乾涸びた魚のにおいが漂っていた。
「またバスに乗るの？」
くみ子がたちどまりながら言った。
「この暑いさかりに歩いて帰るわけにもいくまい」
「飯島をまわって材木座まで歩いて行かない？」
「材木座まで歩くか。……それもいいだろう」
それから二人は海沿いの山道の方にむかった。

2

踏切をこえたところにある小川では雨水があふれ、水は若宮大路にぬける道路にむかって流れていた。

くみ子にひっかかったらおしまいだ、とみんなが言っていたのは、本当はどういうことだったのか、といまの周三はあれこれと考えるが、真実のところはなにも判らなかった。くみ子の母親がよくない、とみんなは言っていた。くみ子が父親を亡くしたのは小学校五年生のときで、くみ子の母親がよくなくなったのはその時分からだった。男を三人替えた、という話であった。また、くみ子とかかわりを持った男が、母親とも同じかかわりを持っている、という噂もたっていた。周三はそれを現実に知っているわけではなかったが、あり得ることだと思った。

あれはどういうことだったのだろう、と周三は小坪から材木座にぬけた日の陽ざかりの午後をおもいかえしてみた。

「暑いわね」

山道の途中でくみ子が立ちどまりながら言った。

「風がないんだな」

周三はハンカチで顔を伝ってながれる汗を拭いながら海を見おろした。よく晴れた日で、伊豆半島と大島が見えた。

「お水がのみたいわね」

「ここには水なんてないよ。材木座にでればサイダーを売っているだろう」

周三は白っ茶けた地面を見ながら答えた。

二人はやがて正覚寺の前にでた。

「あそこでやすんで行かない」

くみ子は正覚寺の石段を見あげて言った。

「そうしようか。あそこは涼しそうだな」

それから二人は石段を二十段ほどのぼり、木蔭になった場所に腰をおろした。

「境内にいったらお水があるかしら」

「それはあるだろうけど、この石段は五十段はある。あと三十段はのぼらねばならん。それより材木座にでた方がいいよ」

周三は答えながら左側に腰かけているくみ子を見た。派手なプリント地のシャツの胸もとからなかがすけてみえ、そこに豊かな乳房があった。

「なんだ、ブラジャーをしていないのか」

「暑いんだもの」

くみ子は不意に顔を染めると両手でシャツをおさえた。風が通うようにたっぷりしたつくりのシャツであった。陽灼けした太腿には産毛があり、周三は、しかし女の太腿はそばで見ると逞しいものだな、と感じた。彼は情感をそそられ、目を海に転じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このとき、くみ子が、ここも風がないわね、と言いながら、彼の肩に頭をのせた。陽ざかりの山道を歩いてきた周三の頭のなかに鬱積しているものがあった。妙なことになりそうだな、と彼はどこかで自分を押えながら、くみ子の背中に腕をまわした。くみ子の上半身がこちらに倒れてきた。こんなことをしてはいけない、と考えながら、彼はくみ子のくちにくちを重ねた。くみ子のくちはチュウインガムの薄荷のにおいがした。

「さ、行こう」

彼はくみ子を突き放すように腕を解くと不意に立ちあがった。

それから二人はだまりこくって石段をおり、材木座まで歩いた。

「バスに乗るの？」

「歩くんじゃつらいよ」

結局二人はサイダーも水ものまずに、バスに乗った。バスは海水浴帰りの人々でいっぱいであった。

「これからまたテニスコートに行くの？」

鎌倉駅前でバスからおりたときくみ子が訊いた。

「いや、家に帰って昼寝をするよ」

「昼寝ならあたしの家にいらっしゃいよ。おふくろは東京にでかけていないわ」

くみ子は周三にやさしい目を向けた。この目は、いつものくみ子の目とはちがう、と周三は感じた。彼はちょっとためらってから、ではくみちゃんの家に行こう、と答えた。

3

道路にあふれた水は足首までありそうだった。迂廻してもこの分ではどこも水があふれているにちがいなかった。

周三は靴と靴下をとってズボンをまくりあげた。それから左手に靴をさげると雨水の流れている道に入った。

そうだ、あの日の午後、おふくろが東京に行っていないというくみ子の家に、俺がなんの下心もなしに出かけた、と言ったら嘘になるだろう、と周三はその陽ざかりの午後をおもいかえした。

くみ子の家も暑かった。

「この部屋が涼しいのよ」

くみ子は北側のうす暗い四畳半に周三を案内した。

「あたし、夏のあいだはこの部屋を使っているの」

窓の外はせまい裏庭で、柿の木が一本たっており、生垣の向うは寺の境内だった。

「蚊がいるだろう」

「蚊取線香をつけておけば大丈夫よ」

くみ子は蚊取線香をつけると、台所から冷えたビールを運んできた。

一本のビールを二人でのんだ。ビールはおいしかった。彼はビールをのみながら、なんのために小坪の海岸になど行ったのだろう、と思った。ヨットを走らせるためにだ、しかしヨットはなかった、それからここに来たが……。彼は、正覚寺の石段で見たくみ子の乳房をおもいうかべた。周三達仲間の表現をかりると、この娘は男にやられたがっている娘であった。すでに誰かにやられたのだろうか。彼は滋や七郎や信三や幹彦の顔を思いうかべたが、くみ子をやっつけたような顔をした奴は一人もいなかった。

ビールをのみ終った二人は、四畳半に枕をならべて昼寝をした。

しかし睡れなかった。

「さっきみたいにキスをしなくてもいいの」

しばらくしてくみ子が言った。

周三は返事をせず目を閉じていた。

「できないのね」

「馬鹿にするな！」

周三はいきなり跳ねおきるとくみ子の上にかさなって行った。

すでに何人かの女を識っていたが、はじめての女はいつも彼をあわてさせた。くみ子は周三のなすがままになっていた。彼はくみ子のショートパンツを脱がせながらくみ子を見た。くみ子は両掌で目を被っていた。

そして彼が最初にきいたのは、痛い！　というくみ子のかすかなさけび声であった。

こいつ、ふざけていやがる、芝居などしやがって！　と彼はかまわず女のなかに入って行った。

しかしくみ子は芝居をしていたわけではなかった。出血をみたとき彼は胸をつかれた。

あれはどういうことだったのだろう、と周三は雨水のなかを歩きながら考えた。くみ子にひっかかったらおしまいだ、と仲間が言っていたのはどういうことだったのか。勝手な推測でくみ子を解釈し、本人の知らないところでくみ子の像が出来あがっていたとしか思えなかった。みんなは、くみ子の母親の像をくみ子に重ねていたのかも知れなかった。

出血を見たときの周三の裡には優しい感情があった。

「なぜ男を識っているように振舞っていたんだい？」

くみ子からはなれ、しばらくして周三は訊いた。

「自分でも判らないわ。……そういう顔をしないと、みんなに悪い気がしたもの」

「馬鹿げた話だ。誰がでたらめな噂をばらまいたんだろう」

「知らないわ」

「みんなは、遊び上手な女だと思いこんでいるよ」

「そうらしいわね」

「昼寝をしにきてこんなことになっちゃったな」
「後悔しているの？」
「いや、そういうことではない」
そして彼は、もういちどやっていいかい？　とくみ子の目をのぞきこんで訊いた。くみ子は顔をあからめ、頷いてみせた。
暮方、周三はくみ子の家をでながら、くみ子をかわいそうだと思った。
しかし、一方では、くみ子にたいして優しさに欠けていたが、あれは何故だったのだろう、と周三は水を視つめながら考えた。水はつめたく気持がよかった。
「明日、逢えるかしら……」
玄関まで見送りにでたくみ子がやさしい目を向けた。
「たぶんね」
周三はあいまいに答えて別れた。
その夜、彼は、自分にたいして呵責にちかい気持でくみ子を考えた。
あくる日、彼はテニスにも出かけず、二階で寝ころんでいた。前日のくみ子とのことが、彼の裡ではっきり呵責となって残っていた。牛乳屋で達哉が手をパッとひらいて見せたことをおもいかえし、どういうわけか達哉に腹がたった。
彼はこの日をいれて三日間どこにもでかけなかった。要するにどこにもある過ちなんだ、くみ子もそう深くは考えていまい、と彼は一時の遊びとしてかたづけようとした。
そしてあくる四日目の午後、彼はテニスコートにでかけた。
そうしたら、そこにくみ子がいた。
くみ子は、コートのそばの木蔭のベンチにしょんぼり掛けていた。二人が小坪へ行った日、彼が掛けていたベンチだった。
「元気かい」
彼はよって行って声をかけた。
「え？　あ、あなたなの」
くみ子ははじかれたようにベンチからたちあがり、顔をあからめた。
「なんでまたテニスコートになど来たんだ」
「来てはいけなかったかしら」
「そういうことはないが、テニスをしない者が来るのはおかしいじゃないか」
彼は、あの日、くみ子が、明日逢えるかしら、と言っていたのをおもいかえし、俺がどこにも出かけなかった三日間、くみ子は毎日ここに来ていたにちがいない、と思った。
「シゲとミキとシンが山から帰ってきたわ」
「そうかい。どこであったんだい？」
「今朝、駅前で、帰ってきたところをあったわ。三人とも

黒ん坊みたいになっていたわ」
「あいつらもともと黒い方だ」
「それから、七郎が、田倉さんの奥さんの部屋から出るところを、御主人に見つかってしまったんですって」
「へえ、そいつは面白いじゃないか。いつのことだい？」
「一昨日の夜だって」
「しかし、なんでまた七郎のやつへまをやったんだろう」
「御主人は新潟へ行っているはずだって」
「予定より早く帰ってきたというわけか」
「そうじゃないの。予定が一日のびたらしいの」
「七郎のやつ、他人の奥さんになってしまった女を追いかけるからそういうことになるんだ。あいつはあきらめることが出来ないんだな」
「そうではなく、七郎の方が追いかけられていたらしいのよ」
「すると、あの奥さん、あんなやさしい顔をしていて、なかは悪女なんだな」
　それから周三はテニスコートを見まわした。コートは二つあり、片方を軟式、片方を硬式用に使っていた。テニスをやりにきた人がかなりいた。
「どうだい、海へ行こうか」
　周三はくみ子をふりかえって言った。
「テニスをやらなくともいいの？」
「テニスなら明日でもできるさ」
　彼は、くみ子が朝からここに来ていたにちがいないと思った。
　二人はテニスコートをおりてきて、牛乳屋により、アイスクリームをたべた。
　それから牛乳屋にラケットをあずけ、海へ行った。
　海水浴の人々で賑わっている海岸道路を歩き、長谷から切通しの坂を越えて極楽寺にでたとき、周三は、くみ子と逢ったことをはっきり悔いていた。俺はなぜ海へ行こうなどと言ったのか。くみ子は遊びができる女ではなかった。遊びが出来ない女と深入りすればどういうことになるか。彼は一年前の春そんな女をひとり知っていた。
　二人は極楽寺坂を越えて稲村ケ崎の駅まで黙々と歩いた。そして、そこから江の電にのり、鎌倉駅前で別れるとき、もう逢わない方がいいと思うな、と周三が言った。くみ子は返事をしなかった。
　それから夏をどうやってすごしたか、周三は、東京から海の家にきていたある中年の人妻と二日間あそんだほか、なんの変哲もない夏だった。

4

若宮大路の段桂の両側の道では水が溢れ、子供達が、八

幡宮の源平池から流れてきた鮒や鯉を手掴みにしていた。
あれから俺がくみ子とであったのは冬のはじめだ、と周三はいま、その冬の夕暮の一刻をおもいかえした。
くみ子が毎夜男とバーをのみ歩いている、と周三がきいたのは秋のはじめだった。
「すごいのんべえになっているよ。おまえとのあいだになにかあったのかい？」
周三は、ある日の暮方、学校帰りに駅前で達哉とあったときに訊かれた。
「なにかあるわけがないじゃないか」
周三はこんな風に答えるしかなかった。
「そうだろうな。しかし、いったい相手の男というのは誰だろう。くみ子が失恋したことだけは事実だ」
周三は、くみ子の生活が荒れている、とはきいていたが、達哉から話をきくまでは半信半疑だった。たった一度かかわりを持っただけで、女がそんな風になるかどうか、という疑いがあった。
しかし達哉から話をきかされたときはさすがに胸が痛んだ。
それからしばらくして、くみ子が岡村さんにやられた、と伝えてきたのも達哉だった。
「あれは、やられた、なんてものじゃなく、やられてやった、というところだろうな」
と達哉は言った。
「岡村さんに会ったのか？」
「あった。にげえ顔をしていた。もっとも、そのときには、俺のほかにもにんげんが同席していたから、くみ子のことは話さなかったが、くみ子とのことは否定していなかったよ。岡村さんは別の話をしていた。一夏ヨットを使わせてやったのはいいが、いったい、おまえ達はヨットのなかでなにをやっていたんだ、と言っていた。なんでも、ゴムでつくられた変な袋ばかり落っこっていたそうだ。俺はあのヨットには一度も乗っていないから、犯人が俺でないことだけはたしかだがね」
そして達哉は、犯人は七郎か信三だろう、とつけ加えた。
周三がくみ子とであったのは十二月のはじめの夜で、バーが並んでいる路地に入る曲りかどだった。彼が曲りかどの居酒屋からでてきたら、着物をきたくみ子がこっちに背をむけ、酔った中年男を相手にわめき散らしていた。
「おめえなんぞに用はねえや。帰れったらさっさとけえれ！」
と怒鳴っていた。
「まるで般若の顔だな」
と男は言っていた。
「般若でけっこうよ」
「では帰るよ。おふくろさんによろしく言ってくれ」

男は酔ってはいたがおとなしかった。
周三は、見てはならないものを見てしまった気がした。早く歩きだせばよかったのに、彼はなにかそこを動けなかった。男が角をまがって行くと同時にくみ子がこっちをふり向いた。
「あら……周三さんじゃないの」
「だいぶ荒れていたようだったな」
彼は仕方なしに言った。
「それがあなたのせいだというの」
くみ子の目はすわっていた。しかしこの女はあのときとすこしも変っていない、と感じた。
「僕のせい？　……もし俺のせいならかんべんしてくれ」
周三は痛みから逃れるように言った。
「うぬぼれないで。誰があなたのせいだと言ったの。……あなたは、なんにも知らないのよ。いまの男、誰だか知っている？」
「知らないね」
「あたしのおふくろの愛人。あたし、十日ばかり前から、そこのバーに出ているの。ロシナンテというお店。おふくろの愛人がよくのみにくるのよ。どう、よっていらっしゃる？　シゲもミキもシンも来るわ」
「今夜はよそう。そのうちに行くよ」
「そう。でも、あなたは、来っこないわ」
「いや、必ず行くよ」
彼は虚をつかれたかたちになり、あわてて答えた。
「そんな約束はしない方がいいわ。……さようなら」
くみ子は思いきりよく周三に背中を見せると路地を入って行った。着物姿のくみ子をみるのははじめてだった。左肩をすこしおとし、足もとを視つめて歩き去るくみ子の背中には、周三の気のせいかも知れなかったが、なにか寂寞としたものが漂っていた。
周三は路地をでて角をまがった。同時に、ちょっと待って、と声がかかった。
ふり向くと、くみ子がこちらに小走りに歩いてきた。
「いまでも、ときどきテニスコートにはいらっしゃっているの？」
周三は胸をつかれ、思わず目をそむけた。この女はいまでもときどき想いだしたようにテニスコートに行っているのだろうか。
「もう行っていない。来年は卒業だろう。時間がなくて」
「そうだったわね。来年は卒業なのね」
「近いうちにロシナンテに行くよ」
「そう。……でも、気にしなくていいのよ」
それからくみ子はくるっと背を向けると、路地を入って行った。
周三は、くみ子が路地の奥に見えなくなるまで立ってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com